

たまいたま 川柳



巻頭言

国語力ということ

願法みつる

小学校や大学の新設問題で、文部科学省や政界が騒がしい。国家主要行政部門から、国民の目が逸らされているようだ。しかし今、文科行政特に教育という部門を、敢えて問題視することも、大事な視点であると思える。戦後のそれが日本語力を低下させた根幹であるからだ。幼稚園児が教育勅語を暗誦しているとの話題に、肯定的な年代層もいるだろう。しかし昔の武家や寺子屋では、論語などの漢文を暗誦することで、文章力を養い読み書く力、更には想像力をも身につけてきたとされている。多くの川柳子の幼かった頃の学校教育の場でもそうだった。だから文部省唱歌が今でも歌えるし、内外の多くの詩歌を語っている。精神的な糧である。

文科省や国語審議会が、為にする朝令暮改的な行政で、日本人の国語力を低下させてきたと、久しく言われている。いまオトナからコドモに至るまでの文章力・筆記力の現状が、それを如実に表している。

スマホやパソコンで、アナタ任せの文字を打つことはできて、句箋一枚すら真面に書けないのでは悲しい。日々国語力の勉強を怠ってはならないと実感している。

日日は好

願法みつる

哲学のジレンマ神の悪魔性

零と無の間にでかい穴があり

肉食を覚えて喧嘩ばかりする

金のある方へ磁石は首を振る

合掌に右と左の手が悩む

四脚の机がいつも揺れたがる

叩き合いとどのつまりの共倒れ

群狼の傍らに立つ墓碑数多

博愛と利己刻々にせめぎ合う

平成29年

7月号 (No.692)

日川協加盟